論　文　ニダバ（*Nidaba*）49（2020），11-20

名詞述語文の小節構造分析

－英語・イタリア語・フランス語の場合－

上　野　貴　史

1. はじめに

DP をコピュラ（copula）の前後に置く名詞述語文<DP_1-Copula-DP_2>は、その意味機能から（1）と（2）のような措定文（predicational sentence）、指定文（specificational sentence）、同定文（identificational sentence）、同一性文（identity sentence）に分けることができる（Higgins（1979））。

（1）英語

a. Baudelaire is a French poet.　（措定文）

b. The best cook is Gertrude.　（指定文）

c. This man is Léon.　（同定文）

d. Cicero is Tully.　（同一性文）

（2）イタリア語

a. Baudelaire è un poeta francese.　（措定文）

b. La migliore cuoca è Gertrude.　（指定文）

c. Quest'uomo è Leone.　（同定文）

d. Cicero is Tullio.　（同一性文）

非措定文（指定文・同定文・同一性文）は、倒置名詞述語文（inverse copular sentence）という小節構造（small clause structure）の小節述語が主語の位置に出現することによって作られるが、フランス語の場合、単純に倒置文にすると（3）のように非文法的となる[1]。

（3）a.　Baudelaire est un poète français.　（措定文）

b. *La meilleure cuisinière est Gertrude.　（指定文）

c. *Cet homme est Léon.　（同定文）

d. *Cicéron est Tullius.　（同一性文）

この様な場合、フランス語では（4）のように指示代名詞 *c'/ce* を介入させる必要がある。

（4）a. La meilleure cuisinière, **c'**est Gertrude.

b. Cet homme **c'**est Léon.

c. Cicéron **c'**est Tullius.　（Amary 2019: 9）

また、イタリア語の倒置名詞述語文においては、(5)のようにコピュラが後置される小節主語と一致する。

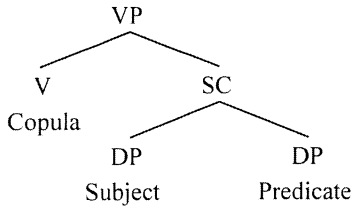
(5) la causa della rivolta sono le foto del muro (Moro 1997: 60)
the cause of.the riot was3PL the pictures of.the wall

このように、名詞述語文は、表層表出において言語によって異なる現象が見られる。そこで、本稿では、英語・イタリア語・フランス語を取り上げ、各言語の名詞述語文の基底構造を小節構造として捉え、その小節構造からの派生を考察することにより、各言語における表層表出の相違点を明らかにしていく。

2. 二種類の小節構造

これまでの先行研究の中では、小節に対して二種類の統語構造の捉え方が取られてきている。一つは、Moro(1997)に代表される対称的小節構造(symmetric small clause)であり、その構造は、概ね(6)のように示すことができる。

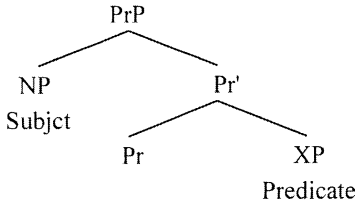
(6)



対称的小節構造においては、主語と述語が平坦に配置されており、その小節(SC)と、Vとなるコピュラが併合するような構造となる。しかし、このような平坦構造は X バー理論に基づかない構造となっており、VP や NP などの他の節が X バー構造を有している中で、小節構造だけが平坦構造であるということに対しては疑問が残るところである。

もう一つは非対称的小節構造(asymmetric small clause)と呼ばれるものであり、Bowers(1993)などで提案されている X バー理論に基づく構造である[2)]。

(7)



X = {V, A, N, P} (Bowers 1993: 595)

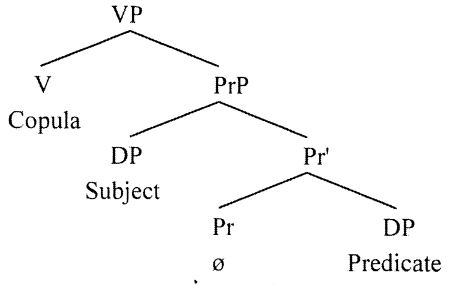
Bowers(1993)による機能範疇 Pr は、小節だけでなく普通の節にも統一的に適用される。例えば、*John will laugh* は(8)のような基底構造を持つとされる。

(8) [$_{IP}$ e [$_{I'}$ will [$_{PrP}$ John [$_{Pr'}$ e [$_{VP}$ laugh]]]]] (Bowers 1993: 595)

(8)では、主要部が空である PrP の補部に *laugh* が投射され、PrP の指定部に主語 *John* が位置している。このような PrP という機能範疇がすべての節に適用されるということには

疑問を感じるが、小節構造を統一的に X バー構造で処理できるという点で Bowers(1993)の提案は有効な考えであると思える。このことから、本稿では小節構造を主要部が空となる非対称的構造として捉えることにし、その基底構造を(9)のように示す。

(9)



(9)の統語構造により、第 1 節で取り上げた英語・イタリア語・フランス語の措定文の基底構造を記述すると(10)のようになる。

(10) a. [$_{VP}$ be [$_{PrP}$ Baudelaire [$_{Pr'}$ ø [$_{DP}$ a French poet]]]]

b. [$_{VP}$ essere [$_{PrP}$ Baudelaire [$_{Pr'}$ ø [$_{DP}$ un poeta francese]]]]

c. [$_{VP}$ être [$_{PrP}$ Baudelaire [$_{Pr'}$ ø [$_{DP}$ un poète français]]]]

次節では、この基底構造から各言語が名詞述語文をどの様に派生させるかについて考察していく。

3. 名詞述語文の派生

3.1. 英語の名詞述語文

Moro(1997)では、措定文の読みとなる(11a)を規範名詞述語文(canonical copular sentence)、指定文の読みとなる(11b)を倒置名詞述語文と呼んでいる。

(11) a. Gertrude is the best cook.

b. The best cook is Gertrude.

Moro(1997)では、これらの基底構造を(12)のような対称的構造として記述しているが、本稿で採用する非対称的構造として書き換えると(13)のようになる。

(12) [$_{VP}$ be [$_{SC}$ [$_{Subj}$ Gertrude] [$_{Pred}$ the best cook]]]

(13) [$_{VP}$ be [$_{PrP}$ [$_{Subj}$ Gertrude] [$_{Pr'}$ ø [$_{Pred}$ the best cook]]]]

(11)は、いずれも PrP 主要部が空である(13)の基底構造から派生するものと考えられる。例えば、措定文として解釈される規範名詞述語文(11a)の派生は、(14)のように、小節主語が TP 指定部へ繰り上がることによって派生する。

(14) [$_{TP}$ Gertrude [$_{VP}$ is [$_{PrP}$ [$_{Subj}$ ~~Gertrude~~] [$_{Pr'}$ ø [$_{Pred}$ the best cook]]]]]

(11a)のような規範名詞述語文は、措定文だけでなく指定文として解釈される場合がある。このような名詞述語文の派生に関して、Roy & Sholonsky(2019)は、TP 内の FocP 主要部[3]が併合(merge)され小節述語がその指定部に移動するような派生を行っていることを指摘

している。例えば、(11a)の指定文読みは、(15)のように、小節述語が TP 内 FocP 主要部に移動し、小節主語が TP の指定部へ繰り上がることで派生すると考えられる。

(15) [$_{TP}$ Gertrude is [$_{FocP}$ the best cook [$_{VP}$ ~~is~~ [$_{PrP}$ [$_{Subj}$ ~~Gertrude~~] [$_{Pr'}$ Ø [$_{Pred}$ ~~the best cook~~]]]]]]

倒置名詞述語文の場合、小節述語が動詞との一致を行うために TP の指定部へ移動するのは措定文と同じであるが、そのまま TP の指定部に留まるとなると問題が生じてくる。その問題とは、束縛理論(Binding Theory)の原理(C)が解決できないというものである。例えば、(16)の主語位置にある *cook* と述語の *Gertrude* は統率範疇内で束縛されており、同一指標である。

(16) The best cook$_i$ is Gertrude$_i$. (=11b)

これらの R 表現は束縛原理(C)に従うと「統率範疇内で自由でなければならない」ということになるが、(16)では統率範疇内で束縛されているにも拘わらず文法的な文となっている。これに関連して、Heycock & Kroch(2002)は、指定文の読みとなる倒置擬似分裂文だけが、"anti-reconstruction"効果[4]が見られ、連結性効果(connectedness effect)[5]が機能することを指摘している。

(17) a. What he$_{*i/j}$ really missed was John$_i$'s dog.

b. John$_i$'s dog was what he$_{i/j}$ really missed. (Heycock & Kroch 2002: 159)

(17a)は規範文であるため、束縛原理(C)により *he* と *John* が共指示とならないが、(17b)は倒置文であるため、連結性効果が機能し、共指示となることが可能となる。この倒置擬似分裂文における連結性効果と同じ効果が非措定文にも適用されているとすると、束縛原理(C)の矛盾を回避することが可能となる。また、このような連結性効果が倒置擬似分裂文の他に話題化(topicalization)構文にも見られるということを考えると、この様な倒置主語は TP の指定部より高い位置を占めていることが想定される。その位置が CP 位層(CP layer)であるという主張もあるが[6]、本稿では複数の主語位置を想定している Cardinaletti (2004)の指摘からこの倒置名詞述語文を考察してみることにする。

Cardinaletti(2004)では、空主語言語(null subject language)・非空主語言語(non-null subject language)というパラミター(parameter)に関係なく、普遍的に主語位置には文法的主語である AgrSP と意味的主語である SubjP があるとしている。「弱い主語」が占める AgrSP には、φ 素性(φ-feature)が名詞句に照合される投射が行われるのに対して、「強い主語」が生じる SubjP には、叙述主語素性("subject-of-predication" feature)が照合される投射が行われる。その構造は(18)のように要約される。

(18) [$_{SubjP}$ [$_{AgrSP*}$ [$_{TP}$ ... [... [$_{VP}$ ...]]]]] (Cardinaletti 2004: 120)

この枠組みで倒置名詞述語文(11b)の派生を示すと(19)のようになる[7]。

(19) [$_{SubjP}$ The best cook is [$_{AgrSP}$ ~~the best cook~~ [$_{FocP}$ Gertrude [$_{VP}$ ~~is~~ [$_{PrP}$ [$_{Subj}$ ~~Gertrude~~]

[$_{Pr'}$ Ø [$_{Pred}$ ~~the best cook~~]]]]]]]]]]

(19)は、TP 内 FocP 指定部に小節主語が移動し、SubjP 指定部に小節述語が AgrSP を経由

して繰り上がっていることを示している[8]。

本節の最後として、英語の名詞述語文の派生を一部修正して(20)のように一般化して示しておく。

(20) a. 規範名詞述語文

i) 措定文 : [$_{SubjP}$ DP$_1$ [$_{AgrSP}$ ~~DP$_T$~~ *be* [$_{VP}$ ~~*be*~~ [$_{PrP}$ [$_{Subj}$ ~~DP$_T$~~] [$_{Pr'}$ ø [$_{Pred}$ DP$_2$]]]]]]

ii) 非措定文 : [$_{SubjP}$ DP$_1$ [$_{AgrSP}$ ~~DP$_T$~~ *be* [$_{FocP}$ DP$_2$ [$_{VP}$ ~~*be*~~ [$_{PrP}$ [$_{Subj}$ ~~DP$_T$~~] [$_{Pr'}$ ø [$_{Pred}$ ~~DP$_2$~~]]]]]]

b. 倒置名詞述語文

i) 非措定文 : [$_{SubjP}$ DP$_2$ [$_{AgrSP}$ ~~DP$_2$~~ *be* [$_{FocP}$ DP$_1$ [$_{VP}$ ~~*be*~~ [$_{PrP}$ [$_{Subj}$ ~~DP$_T$~~] [$_{Pr'}$ ø [$_{Pred}$ ~~DP$_2$~~]]]]]]

3.2. イタリア語の名詞述語文

イタリア語の名詞述語文においても、英語と同様、(2)で示したように、措定文と非措定文というような意味機能を持つものが存在するが、空主語言語であるイタリア語の名詞述語文は、非空主語言語言語である英語とは異なる特性を示す。その相違点の一つとして、(21)のような倒置名詞述語文となった場合のコピュラの一致現象がある。

(21) a. le foto del muro sono la causa della rivolta

b. la causa della rivolta sono le foto del muro (=5) (Moro 1997: 60)

(22) [$_{VP}$ essere [$_{PrP}$ [$_{Subj}$ le foto del muro] [$_{Pr'}$ ø [$_{Pred}$ la causa della rivolta]]]

(22)は(21)の基底構造を示しており、(21a)が小節主語が繰り上がった規範名詞述語文、(21b)が小節述語が繰り上がった倒置名詞述語文である。いずれの文も、コピュラ *sono*（三人称複数）は、小節主語である *le foto del muro* と一致しており、主語の位置に繰り上がった DP と一致する英語とは異なる性質を示す。この様なことに対して、Moro(1997: 69)は、イタリア語において *pro* は全ての文の TP 指定部に常にあり、動詞はこの *pro* と一致するということを指摘している。そして、倒置名詞述語文において、この *pro* が顕在的な DP と同じ φ 素性を持たなければならないとしている。例えば、(23)のような文では、小節内で顕在的な主格代名詞 *io* と同じ一人称単数という φ 素性を *pro* が有しているため、動詞が *sono*（一人称単数）となる。

(23) La vittima sono io.

the victim am I.

このことから、(21b)の倒置名詞述語文では、小節主語である *le foto del muro* と同じ三人称複数という φ 素性を持つ *pro* が AgrSP 指定部に生じ、それと TP 主要部に移動したコピュラが一致することになる。そして、小節述語が AgrSP より高い位置にある SubjP 指定部に生じる。

(24) [$_{SubjP}$ la causa della rivolta [$_{AgrSP}$ *pro*$_i$ sono [$_{FocP}$ le foto del muro [$_{VP}$ ~~sono~~

[$_{PrP}$ [$_{Subj}$ ~~le foto del muro~~]$_i$ [$_{Pr'}$ ø [$_{Pred}$ ~~la causa della rivolta~~]]]]]]]

一方、(25)のような規範名詞述語文に関しては、イタリア語においても英語と同様、措

定文読みと指定文読みが可能である。

(25) Gertrude è la migliore cuoca.

これらの派生は、それぞれ(26a)（措定文読み）と(26b)（指定文読み）のように示すことができる。

(26) a. [$_{SubjP}$ Gertrude [$_{AgrSP}$ *pro* è [$_{VP}$ **è** [$_{PrP}$ [$_{Subj}$ ~~Gertrude~~] [$_{Pr'}$ ø [$_{Pred}$ la migliore cuoca]]]]]]

b. [$_{SubjP}$ Gertrude [$_{AgrSP}$ *pro* è [$_{FocP}$ la migliore cuoca [$_{VP}$ **è** [$_{PrP}$ [$_{Subj}$ ~~Gertrude~~] [$_{Pr'}$ ø [$_{Pred}$ ~~la migliore cuoca~~]]]]]]]

イタリア語の派生においては、空主語言語であるため AgrSP 指定部が常に *pro* で占められていることになる。

本節で考察したイタリア語名詞述語文の派生を一般化して示すと(27)のようになる。

(27) a. 規範名詞述語文

i) 措定文　：[$_{SubjP}$ DP$_1$ [$_{AgrSP}$ *pro*$_i$ *essere* [$_{VP}$ ~~*essere*~~ [$_{PrP}$ [$_{Subj}$ ~~DP$_T$~~]$_i$ [$_{Pr'}$ ø [$_{Pred}$ DP$_2$]]]]]]

ii) 非措定文：[$_{SubjP}$ DP$_1$ [$_{AgrSP}$ *pro*$_i$ *essere* [$_{FocP}$ DP$_2$ [$_{VP}$ ~~*essere*~~ [$_{PrP}$ [$_{Subj}$ ~~DP$_T$~~]$_i$ [$_{Pr'}$ ø [$_{Pred}$ ~~DP$_2$~~]]]]]]]

b. 倒置名詞述語文

i) 非措定文：[$_{SubjP}$ DP$_2$ [$_{AgrSP}$ *pro*$_i$ *essere* [$_{FocP}$ DP$_1$ [$_{VP}$ ~~*essere*~~ [$_{PrP}$ [$_{Subj}$ ~~DP$_T$~~]$_i$ [$_{Pr'}$ ø [$_{Pred}$ ~~DP$_2$~~]]]]]]]

3.3. フランス語の名詞述語文

フランス語の規範名詞述語文は、(28a)のような指示代名詞 *ce* が出現しない場合と、(28b)のような *ce* が出現するような文の両方で見られる。

(28) a. Jean est mon meilleur ami.

b. Jean c'est mon meilleur ami. (Roy & Shlonsky 2019: 155)

Jean (CE).is my best friend

このような文における解釈の違いは、意味的なものではなく情報的なものであり(Roy & Shlonsky 2019: 155)、本稿で考察している措定文(28a)と指定文(28b)という読みにそれぞれ相当する。

まず、(28a)の措定文読みの派生は(29)のようになる。

(29) [$_{SubjP}$ Jean [$_{AgrSP}$ ~~Jean~~ est [$_{VP}$ ~~est~~ [$_{PrP}$ [$_{Subj}$ ~~Jean~~] [$_{Pr'}$ ø [$_{Pred}$ mon meilleur ami]]]]]]

フランス語の措定文においては、小節主語 *Jean* は、非空主語言語であるため、英語と同様、AgrSP を経由して SubjP に生じる。

これに対して、(28b)のような指定文読みにおいては、指示代名詞 *ce* が必要となる。この代名詞 *ce* に関して、Moro(1997)は、これをイタリア語の *pro* と同じ代名詞述語(propredicate)として扱っている。しかしながら、*ce* が小節述語であるというこの主張には問題がある。

(30) a. *Pierre est **ce**.

b. Pierre est **cela**.

Pierre is this

ce と同じ指示代名詞である *cela* であれば、(30b) のように述語として使用可能であるが、*ce* は (30a) で示したように述語になれない要素である。このように *ce* は述語要素ではないので、イタリア語の小節述語 *pro* とは異なる。Moro (1997) で提示されている小節の対称的構造においては、小節主語でも小節述語でもない *ce* を出現させる場所がないことから、*ce* を小節述語として扱っているとも考えられるが、小節を非対称構造として捉えると、*ce* を PrP の主要部に出現するものとすることが可能となる [9]。このように、虚辞代名詞 *ce* が PrP の主要部を占める構成素であるとして、その基底構造を記述したものが (31) となる。

(31) $[_{VP}$ *être* $[_{PrP}$ $[_{Subj}$ $DP_1]$ $[_{Pr'}$ *ce* $[_{Pred}$ $DP_2]]]]$

この基底構造から (28b) の指定文を派生させたものが (32) となる。

(32) $[_{SubjP}$ Jean $[_{AgrSP}$ c'est $[_{FocP}$ mon meilleur ami $[_{VP}$ ~~est~~ $[_{PrP}$ $[_{Subj}$ ~~Jean~~$]$ $[_{Pr'}$ ~~ce~~ $[_{Pred}$ ~~mon meilleur ami~~$]]]]]]]$

(32) は、小節述語が TP 内 FocP 指定部に移動し、*ce* が AgrSP、小節主語が SubjP に繰り上がることを示している。

このような虚辞代名詞 *ce* の介入は、(33) で示すように、非措定文では必須である。

(33) a. Les criminels, **c'**est nous.

b. *Les criminels est nous.

the criminals *ce*-is us

そして、(33a) の指定文の派生は、(34) のように示すことができると思われる。

(34) $[_{SubjP}$ Les criminels $[_{AgrSP}$ c'est $[_{FocP}$ nous $[_{VP}$ ~~est~~ $[_{PrP}$ $[_{Subj}$ ~~nous~~$]$ $[_{Pr'}$ ~~ce~~ $[_{Pred}$ ~~les criminels~~$]]]]]]]$

(34) では、小節主語である *nous*（一人称複数）と小節述語である *les criminels*（三人称複数）が共に動詞 *est*（三人称単数）とは一致せず *ce* と一致している。このことからも、*ce* が AgrSP の指定部を占めていることが理解できる。

以上のことから、フランス語の名詞述語文の派生を一般化して示したものが (35) となる。

(35) a. 規範名詞述語文

i) 措定文　：$[_{SubjP}$ DP_1 $[_{AgrSP}$ ~~DP_T~~ *être* $[_{VP}$ ~~*être*~~ $[_{PrP}$ $[_{Subj}$ ~~DP_T~~$]$ $[_{Pr'}$ Ø $[_{Pred}$ $DP_2]]]]]]$

ii) 非措定文：$[_{SubjP}$ DP_1 $[_{AgrSP}$ *c'être* $[_{FocP}$ DP_2 $[_{VP}$ ~~*être*~~ $[_{PrP}$ $[_{Subj}$ ~~DP_T~~$]$ $[_{Pr'}$ ~~ce~~ $[_{Pred}$ ~~DP_T~~$]]]]]]]$

b. 倒置名詞述語文

i) 非措定文：$[_{SubjP}$ DP_2 $[_{AgrSP}$ *c'être* $[_{FocP}$ DP_1 $[_{VP}$ ~~*être*~~ $[_{PrP}$ $[_{Subj}$ ~~DP_T~~$]$ $[_{Pr'}$ ~~ce~~ $[_{Pred}$ ~~DP_T~~$]]]]]]]$

4. 結論

本稿では、英語・イタリア語・フランス語の名詞述語文を PrP で構成される小節構造から分析することにより、表層表出に見られる相違点についての指摘を行った。

規範名詞述語文の措定文の基底構造は、PrP 主要部を空とする (36) のような構造となる。

(36) $[_{VP}$ V $[_{PrP}$ DP_1 $[_{Pr'}$ Ø $[_{DP}$ $DP_2]]]]$

この基底構造から (37) のような派生をすることにより措定文は生成される。

(37) a. 英語　　：$[_{SubjP}$ DP_1 $[_{AgrSP}$ $\cancel{DP_T}$ *be* $[_{VP}$ $\cancel{be}$ $[_{PrP}$ $[_{Subj}$ $\cancel{DP_T}]$ $[_{Pr'}$ Ø $[_{Pred}$ $DP_2]]]]]$

b. イタリア語：$[_{SubjP}$ DP_1 $[_{AgrSP}$ *pro essere* $[_{VP}$ $\cancel{essere}$ $[_{PrP}$ $[_{Subj}$ $\cancel{DP_T}]$ $[_{Pr'}$ Ø $[_{Pred}$ $DP_2]]]]]$

c. フランス語：$[_{SubjP}$ DP_1 $[_{AgrSP}$ $\cancel{DP_T}$ *être* $[_{VP}$ $\cancel{être}$ $[_{PrP}$ $[_{Subj}$ $\cancel{DP_T}]$ $[_{Pr'}$ Ø $[_{Pred}$ $DP_2]]]]]$

この派生では、義務的な V-to-T 移動を行うイタリア語・フランス語と、行わない英語においてコピュラの移動の違いが見られる。また、空主語言語であるイタリア語は、AgrSP 指定部に *pro* を生じるが、非空主語言語である英語・フランス語は、AgrSP 指定部に小節主語の痕跡を残す。

小節述語の TP 内 FocP の移動がある規範名詞述語文の非措定文の派生は(38)のようになる。

(38) a. 英語　　：$[_{SubjP}$ DP_1 $[_{AgrSP}$ $\cancel{DP_T}$ *be* $[_{FocP}$ DP_2 $[_{VP}$ $\cancel{be}$ $[_{PrP}$ $[_{Subj}$ $\cancel{DP_T}]$ $[_{Pr'}$ Ø $[_{Pred}$ $\cancel{DP_2}]]]]]]]$

b. イタリア語：$[_{SubjP}$ DP_1 $[_{AgrSP}$ pro_i *essere* $[_{FocP}$ DP_2 $[_{VP}$ $\cancel{essere}$ $[_{PrP}$ $[_{Subj}$ $\cancel{DP_T}]_i$ $[_{Pr'}$ Ø $[_{Pred}$ $\cancel{DP_2}]]]]]]]$

c. フランス語：$[_{SubjP}$ DP_1 $[_{AgrSP}$ *ce être* $[_{FocP}$ DP_2 $[_{VP}$ $\cancel{être}$ $[_{PrP}$ $[_{Subj}$ $\cancel{DP_T}]$ $[_{Pr'}$ $\cancel{ce}$ $[_{Pred}$ $\cancel{DP_2}]]]]]]]$

非措定文の場合、フランス語の基底構造には、PrP 主要部に虚辞代名詞 *ce* が出現する。このことにより、フランス語では AgrSP に *ce*、SubjP に述語主語が生じることになる。

非措定文となる倒置名詞述語文は、(39)のような派生が行われる。

(39) a. 英語　　：$[_{SubjP}$ DP_2 $[_{AgrSP}$ $\cancel{DP_2}$ *be* $[_{FocP}$ DP_1 $[_{VP}$ $\cancel{be}$ $[_{PrP}$ $[_{Subj}$ $\cancel{DP_T}]$ $[_{Pr'}$ Ø $[_{Pred}$ $\cancel{DP_2}]]]]]]]$

b. イタリア語：$[_{SubjP}$ DP_2 $[_{AgrSP}$ pro_i *essere* $[_{FocP}$ DP_1 $[_{VP}$ $\cancel{essere}$ $[_{PrP}$ $[_{Subj}$ $\cancel{DP_T}]_i$ $[_{Pr'}$ Ø $[_{Pred}$ $\cancel{DP_2}]]]]]]]$

c. フランス語：$[_{SubjP}$ DP_2 $[_{AgrSP}$ *ce être* $[_{FocP}$ DP_1 $[_{VP}$ $\cancel{être}$ $[_{PrP}$ $[_{Subj}$ $\cancel{DP_T}]$ $[_{Pr'}$ $\cancel{ce}$ $[_{Pred}$ $\cancel{DP_2}]]]]]]]$

コピュラとの一致は AgrSP 指定部にある主語と行われるため、各言語の一致の仕方が異なってくる。例えば、英語は DP_2、イタリア語は DP_1 と連鎖する *pro*、フランス語は虚辞代名詞 *ce* と一致することになる。

倒置名詞述語文における小節主語に関しては、(40)で示すように、英語とイタリア語の倒置名詞述語文では小節主語が主格代名詞[10]として現れる一方で、フランス語は主語人称代名詞の非接語形式(non-clitic form)が出現するという違いが見られる。

(40) a. The criminal is **he**.

b. La vittima sono **io**.　　(=22)

c. Les criminels c'est **eux**.

d. *Les criminels c'est **ils**.

the criminals *ce*-is they

フランス語においては、小節主語に接語形式(clitic forms)の主語人称代名詞 *ils* ではなく、非接語形式の *eux* が使用される。Kaiser(2009)によると、フランス語の主語人称代名詞は、15世紀までにその独立性を失い接語代名詞となり、同時に強斜格代名詞から発達した新しい主語代名詞形式である非接語形式が出現したとされる。このようなフランス語における主語代名詞体系の変化は、空主語言語パラミターの変化に伴うものであるが、このようなパラミターの変化を経験したことにより、フランス語は英語やイタリア語にはない独自の主

語代名詞を発達させている。

以上のことから、基底構造と空主語言語パラミターの相違と変遷によりそれぞれの言語の表層表出が違っているということが指摘できると思われる。

＜註＞

1) 同定文と同一性文はコピュラ *est* に強い強勢が置かれると、対比焦点の読みが生じ文法的になる。

2) Bowers(1993)では、Pollock(1989)の小節が Agr であるという主張を否定し、新しい機能範疇 Pr が提案されている。

3) Belletti(2004)などで指摘されている CP の左端構造と平行的な節内 *v*P/VP の周縁部にある情報構造を指す。

4) 指示表現や CP 内部に埋められた R 表現が、「空所」を c 統御(c-command)する代名詞と共指示となることができる効果のこと。

5) 「Kayne(1983)独特の g 投射(g-projection)という概念を基礎に構成された一種の空範疇原理で空範疇(ECP)とその先行詞の間に連結性条件(connectedness condition)が満たされるならば、空範疇はその先行詞に連結(connect)され、適格文となる」(安藤・小野 1993: 63)という効果。

6) Heycock & Kroch(2002)や Amary(2019)などを参照。

7) フランス語名詞述語文に関して、Roy & Shlonsky(2019)では、ターゲットそれ自身ではなくそれを含む範疇を移動させる"Smuggling"という操作で非措定文を派生させている。

8) このような派生では、小節主語と小節述語が A バー位置に生じることとなり、Amary(2019)は、このような A バー位置にある構造では、束縛原理(C)は適用されないということを主張している。

9) 本稿では概ね Amary(2019)の主張に従っている。

10) 英語においては、一人称単数の場合は、"The criminal is me"のように対格 *me* が出現する。しかし、これは、他の代名詞、例えば *she*, *he*, *we* などの音からの類推による使用であると考えられる。

＜参考文献＞

Amary, Valérie (2019) "Copular Sentences and Binding Theory: The Case of French and Principle C". *Corela* 17-1, 1-32.

Belletti, Adriana (2004) "Aspects of the Low IP Area", in Rizzi Luigi (ed.), *The Structure of CP and IP: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 2*, Oxford University Press, 16-51.

——— (2005) "Answering Strategies. A View from Acquisition", in Baauw, S., F. Drijkoningen & M. Pinto (eds.), *Romance Languages and Linguistic Theory 2005*, Benjamins Publications.

Bowers, John (1993) "The Syntax of Predication", *Linguistic Inquiry* 24, 591-656.

Cardinaletti, Anna (2004) "Toward a Cartography of Subject Positions," in Rizzi, Luigi (ed.), *The Structure of CP and IP: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 2*, Oxford University Press, 115-165.

Citko, Barbara (2008) "Small Clause Reconsidered: Not So Small and Not All Alike," *Lingua* 118, 261-295.

Heycock & Kroch (2002) "Topic, Focus, and Syntactic Representations", in Mikkelsen L. & C. Potts (eds.), *WCCFL 21 Proceedings*. Cascadilla Press, 141-165.

Higgins, Francis Roger (1979) *The Pseudo-cleft Construction in English*, Routledge.

Kayne, Richard (1983) "Connectedness", *Linguistic Inquiry* 14, 223-249.

Kaiser, Georg A. (2009) "Losing the Null Subject. A Contrastive Study of (Brazilian) Portuguese and (Medieval) French", in Kaiser, Georg A. & E.-M. Remberger (eds.), *Proceedings of the Workshop "Null-subjects, Expletive, and Locatives in Romance"*, Universität Konstanz, 131-156.

Moro, Andrea (1997) *The Raising of Predicates: Predicative Noun Phrases and the Theory of Clause Structure*, Cambridge University Press.

Munaro, Nicola & Jean-Yves Pollock (2008) "Qu'est-ce-que (qu)-est-ce-que?: A Case Study in Comparative Romance Interrogative Syntax", in Cinque, Guglielmo & Richard S. Kayne (eds.), *The Oxford Handbook of Comparative Syntax*, Oxford University Press, 542-606.

Pollock, Jean-Yves (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.

Roy, Isabelle & Ur Shlonsky (2019) "Aspects of the Syntax of ce in French Copular Sentences", in Arche, María J., Antonio Fábregas, & Rafael Marín (eds.), *The Grammar of Copulas Across Languages*, Oxford University Press, 153-169.

Togeby, Knud (1983) *Grammaire française Volume III: Les Formes Impersonnelles du Verbe et la construction des verbs*, Akademisk Forlag.

安藤貞雄・小野隆啓 (1993)『生成文法用語辞典』, 大修館書店.

上野貴史 (2019a)「イタリア語繰り上げ動詞・非対格動詞における基底構造の通時的変化：小節構造分析における再述接語と虚辞代名詞」,『歴史言語学』第 8 号, 1-40.

――― (2019b) 「上代日本語における名詞述語文の小節構造分析：現代日本語の名詞述語文との比較から」,『広島大学大学院文学研究科論集』第 79 巻, 63-95.

目黒士門 (2015)『現代フランス広文典［改訂版］』, 白水社.